

表、年表、地図、索引等を備えた本書は、今後のわが国のこの分野における教育思想の研究の発展に資する所多大であり、その刊行は画期的な意義をもっている。末筆ながら筆者および編集者の方々の御苦勞に対して、一読者としてこころから感謝申し上げたい。

*Peter Riethe* : Hildegard von Bingen,  
*Das Buch von den Steinen. Nach den Quellen*  
*übersetzt und erläutert.*

Salzburg, Otto Müller Verlag, 1979, 104 S., 24 farb. Abb.

塩 谷 元 紹

本書は、西独の歯科学者 Peter Riethe (1979年現在 Tübingen 大学正教授/以下R) の手に成る聖ヒルデガルト (以下H) *Physica* 第4書「石の書」(*Lib. IV. De lapidibus*) の「初の完訳」(R)であり、Salzburg・Otto Müller Verlag から刊行の独訳によるH全集の、刊行順で第8巻目に該当するものである。因みにRのH研究がこれ以前に生み出した大きな業績は次の2つである。——①学位論文: Der Weg Hildegards von Bingen zur Medizin unter besonderer Berücksichtigung der Zahn- und Mundleiden (Med. Inaug. Diss. Mainz, 1952). ②*Physica* 全9書の抄訳: Hildegard von Bingen, *Naturkunde. Das Buch von dem inneren Wesen der verschiedenen Naturen in der Schöpfung. Nach den Quellen übersetzt und erläutert von Peter Riethe* (Salzburg, Otto Müller Verlag, <sup>1</sup> 1959, <sup>2</sup> 74, <sup>3</sup> 80). (これらの業績への学術的評価は、既に Kassius Hallinger が後者の抄訳に対する書評[in *Archiv für mittelhheinische Kirchengeschichte* 12 (1960)]の中で显示済みである。)

さて「石の書」(訳出の底本・Migne 版テキスト [PL t. 197 所収/以下M] で

は序文と全26章)の内容は一口で言えば宝石論である。Rがこの書の研究をどのような経緯で進めたか、その詳細は評者には明らかでない。しかし彼がこの書を巡る所謂典拠の問題(Hの著作内容〔彼女自身の証言では visio 体験によって成立〕の由来、とりわけ古代中世の諸文献からの影響度を探る問題)に対して強い関心を寄せていたことは、彼のH研究の歩みからしても容易に窺われるところである。この問題に関し、既にRは20年前の抄訳において、H以前の宝石論の中にHが彼女の宝石論を執筆する際依拠していたことを推測させるような確実な文献的模範は見出せないとする Rudolf Creutz の結論(vgl. Hildegard von Bingen und Marbodus von Rennes (1035—1123) über die Heilkraft der Edelsteine, in *Studien und Mitteilungen O.S.B.*, 49(1931))へ支持を表明していたが(vgl. 1959 [=380], S. 80f.),特定の文献的模範を指摘し得ないとするこの基本的立場は、その後の一層の研鑽に支えられている表題の訳業においてもその儘継承されている(「様々な年齢(古さ)や様々な出自の岩石学文献から或る全くのもしくは大凡の Literarizität を指摘しようと試みても成果は現われない」[S. 19])。そしてこの問題に対するRの研鑽の跡を具体的に示すものが、本訳業巻末の註で行なわれる、個々の宝石の性質・効能(医薬的・魔力的効能)に関する他の宝石論との間の符合点の指摘である(S. 89—94)。ここでは、Hの宝石論について従来より報告される、こうした符合点の数少なさが、幾つかの宝石論(Theophrastus, Dioskurides, Aetius Amidenus, Damigeron, Epiphanius, Isidorus, Ps. Aristoteles, Lautere Brüder von Basra, Marbodus)の原典・翻訳、その他の参考文献の活用のもとで、改めて浮き彫りにされる形となっているようである(この問題に関するRの研究成果としては次の論文をも参照—Die medizinische Lithologie der Hildegard v. Bingen, in *Festschrift zum 800. Todestag der Heiligen* (hg. v. A. Ph. Brück), Mainz, 1979)。無論ここで指摘される符合も、他の宝石論(テキスト)との間の字句通りの符合として指摘されているのではない。寧ろRにおいては、こうした符合点を含むHの宝石論自体が、彼女の生きた12世紀という時代の宝石に関する諸表象を独自の叙述様式で再現させるものとして、捉えられているのである(Rは口承による民間療法伝承・修道院の伝統へのHの依拠を主張する〔抄訳 S. 81/完訳カバー〕)。周知のように中世という時代は宝石に関する豊かな諸表象を蓄積していた時代である。その中にはギリ

シャ・ローマ世界、アラビア世界に由来する表象も存在すれば、キリスト教世界で育まれた寓意的解釈アレゴリーに由来する表象も存在する。表題の訳業はこれ等の諸表象に対して直接立ち入った解説を与えるものではないが、その註や冒頭の解題で宝石論研究における先行の諸文献(Creutz の他, Hermann Fühner, Christel Meier 等のもの)からの参照箇所を随所に引用・指示することにより、Hの宝石論とかの諸表象との関わり合いを探る為の有益な案内書としての性格を担い得ているように思われる。

ところで表題の訳業には、この他原典批判の問題との関連で、評者が知る限りの *Physica* の従来の諸訳業には見出すことの出来ない極めて貴重な研鑽の跡が存在する。それは本訳業が底本Mの他に *Physica* の現存最古・13世紀の写本である Wolfenbuttel Hs. (Herzog August Bibliothek, Cod. Guelf. 56. 2 Aug. 4°/以下 G) を併用し、翻訳という間接的な形ながら欠陥の多い前者のテキストの改善を試みている点である (因みに S. 30, 32 には G・f. 90<sup>v</sup>-91<sup>r</sup> の写真版が公開されている)。周知のように *Physica* の主要写本には、Gの他 Pariser Hs. (Bibliothèque Nationale, Cod. lat. 6952/15世紀・Mの基礎写本〔以下 P〕)、Brüsseler Hs. (Bibliothèque Royale, Cod. 2551/15世紀・以下 B) の2つが存在するが、これ等の内GがRによって特に活用されたのは、この写本について前世紀の Carl Jessen 以来報告されているその貴重な資料的価値 (*Physica* のテキストの純化・拡大に役立つ) が着目されてのことと思われる。事実「石の書」の範囲内においてもGは様々な箇所箇所でMの改善の為に活用されている。以下ここでその全ての改善箇所を列挙することは出来ないが、M (P) におけるテキストの欠落箇所 (欠落と解釈される箇所) だけに限って取り上げてみても、—V・19 <ardet, ↓ tunc>, VI・35 <vino ↓ salivam>, do.・71-72 <tuum, ↓ praevaricante>, VII・25 <oppressa ↓ non>, VIII・35 <illo ↓ cherubin>, IX・20 <eisdem ↓. Sed>, XIII・3 <habet ↓. Et>, do.・6 <vires ↓ in>, XV・4 <crescit ↓ ut>, XVI・1 <nascitur, ↓ ab>, do.・55 <lapidis ↓ modice>, XVII・2 <qui ↓ sunt>, do.・12-13 <diabolicam ↓ malitiosi>, XVIII・33 <evvertunt ↓.>, XX・2 <coloris ↓, ex>—等の箇所箇所で、我々はGによるテキストの補充の跡を見出すことが可能である (V・19=M・Cap. V の最初の行から19行目、↓は補充箇所を示す/以下同様)。

しかし一方で、RによるGの活用が不徹底な側面を残していることも否定出来な

い事実である。RがGの活用に当たりP・Bを併用しなかったということが、このことと大きく関わっているのである。とりわけ次の2箇所の誤謬は、先の典拠の問題との関連からも重要なものである。——① Jacinctus の章：RはII・2〈mites illos calores〉にその儘従い、Gの該当箇所(=B)\*〈nunc hos nunc illos colores〉を採用していない(Mの mites は正しくは nunc (P))。一連の文脈には3世紀の Solinus 以来伝えられる「風信子石の輝きの天候による変化」という表象が反映している、と見做されるべきである。② Adamas の章：RはG・f. 103<sup>v</sup>・ll. 6-9〈Leo…incidat.〉(M (P)には含まれず)がXVII・33-38〈Sed…incidat.〉の内容と関連する資料であることを看過し、XVII・37〈poterunt, ↓calybem〉間の欠落箇所(Bによって補充可能)\*に正しい解釈を与えていない(完訳 S. 64 f., 92/Plinius 以来伝えられる「山羊の血液による金剛石の軟化」説は当面の箇所では直接には現われていないが、Hにおいても知られていた可能性は指摘されるべきである [vgl. *Causae et Curae*, ed. Kaiser, S. 217, 17-21])。

またこれ以外でも、RはPを併用することによって、Mの編集上に見られる数多くの不備(詳細は本誌第26号所収の拙稿を参照)を認識し、同時にこのことによって、例えばVIII・50-51〈auferat, ↓et v.〉, XIII・34〈si ↓acer〉, XIV・4〈pestilentiam, ↓aut〉といった箇所に補充を行なうことが可能であったろうし(VIII・50-51についてはPのみ)、更にBを併用することによって、例えば Praefatio・(10-)11〈(eruun-) tur ↓.In〉, do・55〈quibusdam ↓et〉, VI・11〈calefaciat, ↓et〉といった箇所にも補充を行なうことが可能であったろうと思われる(VI・11についてはBのみ)\*。

またBの「石の書」の内容(評者は未だその本格的な報告例を知らない)については、それがM (P)のテキストの改善に役立つという事実の他に、更に次の事実一(Rが斥けている筈の)他の宝石論との間の字句通りの符合をその中で指摘することが出来るという、注目すべき事実(目を留めておく必要がある(例えば、Marbodiusの *Liber lapidum* [中世を代表する著名な宝石鑑(PL t.171 所収)]については、§V.〈Tollit…dolorem.〉/do・〈(Sed) qui…jubetur.〉, 〈(Scilicet ardorem r. interiorem.〉)←→B・f. 58<sup>v</sup>/59<sup>r</sup>の各該当箇所間等に、また Isidorusの *Etymologiae* (ed. Lindsay)についても、XVI, VIII, 3〈(Onyx a. q.) habeat

in se...ovvXa dicunt.) / XVI, XIII, 2 (Adamans...incalescit;) ←→ B·f. 57<sup>v</sup> / 63r<sup>v</sup> の各該当箇所等にそのような符合を指摘することが可能である\*)。

このような事実に対して先ず採り得る解釈は、その原因を後世の写字生によるテキストの恣意的な挿<sup>インテルポラチオン</sup>入に求めるということであろう。しかし評者の私見では、なおこれ等の問題箇所のテキストの内にH自身の真筆に由来する資料が含まれている可能性も排除し切れないうに思われる。Hの自然科学的著作 (*Physica/Causae et Curae*) の原型が既存の乏しい資料状況からは復元し難いという背景の他に、これ等の著作が持つとされる特異な性格 (visio 体験に基づき特定期間内に執筆されたHの他の著作とは異なり、長期にわたってテキストの新たな追加が継続され得たであろうこと) を考慮に入れてみると、H自身による他の作家からのテキストの借用を推測し得る余地はやはり残されている、と思われるからである。そしてこの際、当然のことながら、H自身による読書の可能性 (Rはこれを排除していないようである [抄訳 S. 7 参照]) も何ら排除される必要はないように思われる。Marbodus や Isidorus のかの両著作のように当時広く知られていた著作がHの目に直接触れることがなかったとする断定を、一体どうして我々は下すことが出来るだろうか？

何れにしても、Hの自然科学的著作を巡る資料考証は、テキストの未整備という状況とも関連し、今後の研究にその大きな進展を俟たなければならない現状にある。写本研究に支えられた画期的とも言うべき表題の訳業の出現が、そのような進展の為のひとつの足掛かりとなることを願って止まない次第である。

最後に表題の訳業に見られる語義解釈の明らかな誤謬を3点程指摘しておくことにする。—① I·51 (cocturam operat) : Rはここを誤って <c. aperit> と読み替えたか? (coctura) は <ustio (=Brennen)> と同義 (vgl. *Causae et Curae*, ed. Kaiser, S. 128 ff.). <entzündliche Geschwulst> ではない。② VIII·49 (morach) : この語は <mlat. moretum> に対応する <sup>ド</sup><sup>イ</sup><sup>ツ</sup> <sup>語</sup><sup>単</sup><sup>語</sup> と見られる。その意は <Gemusesalat> ではなく <Maulbeerwein>。③ XX·22, 26 (hubo, hubin) : この語は <Geschwulst> ではなく <Zäpfchen> (口蓋垂) の意。\* © Bibliothèque Royale Albert Ier, Bruxelles.